

自然の保護と再生をテーマに、野洲川の鹿川敷地を活用して、県民はもとより下流府県で環境保全に取り組む人々の参加を募り、手づくりによる豊かな森づくりを目指す。なによりも大切なのはそのプロセスを見守ること。親から子どもへ育樹を受け継ぎ、はるかな時の流れの中で自然の素晴らしさと共生を実感すること。一人ひとりの心を込めた苗木が大きく育ち森ができるまでに、実に半世紀以上を要する壮大な計画「びわこ地球市民の森」が、いま大きく動きはじめた。

「環境人リレーインタビュー21」④

滋賀県理事員  
びわこ地球市民の森担当

今井 紘 一 さん

# 半世紀以上の歳月をかけて 生命きらめく手づくりの森を

「びわこ地球市民の森」づくり構想の基本概念をお聞かせいただけますか。

今井 三つの要素があります。一つは知事が積極的に推進している「自然と人の共生」への取り組みです。二十世紀は自然の破壊が続いた世紀でした。その結果、各地域から地球規模まで数多くの深刻な問題が生じています。地球温暖化に

おいては二酸化炭素の低減が世界的な課題になっていて、これを吸収する緑の保全と再生が重要な施策となっています。

そこで、県民参加による森づくりの構想が出てきたわけです。二つ目はこれからの地域づくりの大きなビジョンとなっている「マザーレイク21計画」です。水質保全・水源かん養とともに自然的環境・

景観保全を目指しているわけですが、琵琶湖周辺の生物環境、特に生態系に配慮したビオトープ空間が保全されなければ、これからの琵琶湖を守ることはむずかしいと考えています。「びわこ地球市民の森」を、この一つのプロジェクトにしたいと位置づけています。三つ目は、

国において平成十一年にスタートした

「住民参加による『平成の森づくり』事業（平成十四年度からは「自然再生緑地整備事業」）に採択されたことです。このような三つの要素が起点となって県民の手による森づくり「びわこ地球市民の森」構想が動きはじめたのです。

「県民の手づくりによる森づくり」と

いう発想は非常に新鮮に感じますが、そのあたりのことを、もう少し具体的に教えていただけますか。

今井 「びわこ地球市民の森」構想には二つの考えが組み込まれています。一つは、いま申し上げたように「森を創る」、「自然を再生する」ということ。もう一つは県民参加型で事業を進めていくことです。県民の方々はもとより下流府県の人々、さらにできることならば海外からも参加してもらえような森づくりを展開していきたいと考えています。まず、植樹。一人でも多くの方に参加いただきたい、森を創るために苗木を植えていただく。次に、これを育てていただく育樹。この育成に直接かかわっていただくことを重視しています。県民や企業の方々、NGOの皆様、行政が一体となって二十一世紀の森を創り出したいと願っています。このように共に作業をすること（パートナーシップ）が大きなテーマになっています。行政が基盤の整備、つまり木を植えるための植樹地を造成し、園路や駐車場をはじめとする設備を整えた後、植樹と育樹は県民をはじめとする皆様と共に行うという考え方です。すでに、県民の皆様、企業の方々、森林保全にかかわるボランティアの人々…さらに、県外からも積極的にご参加いただいで、この事業が進んでいます。できるだけ、多くの方々が自主的にかかわっていただけるように、あまり細かいルールのようなものはつくっておりません。

完成した森を見るのではなくそのプロセスを実感してほしい

県民の方々はもとよりこの構想に賛同する人々が主体的に参加し、それぞれの手で長い歳月を注いで森を創っていく…。それにしても、壮大な事業ですね。森ができるまでに何十年もかかるわけですから、親から子へ受け継いでいくことになるわけですね。

今井 そうです。まず苗木といっても五、六センチが五、六メートルになるのは、少なくとも十年以上はかかります。それでも、まだ森にはなっていません。ですから、完成した森を見ていただくのではなく、森ができていくプロセスを見続けることがいちばん大切だと考えています。自分で植えた木がどのように育っていくのか。どんな森になっていくのか。繰り返し来ていただくことで、これらをご自身の目で確かめていただきたいのです。その中で実感的に自然を理解し、親しんでいたとき、抽象的な言葉ではなく、自然との共生を感じとっていただければと願っています。これがもっとも大切にしたいポイントです。森ができるまでには早くても半世紀ほどかかります。いま、植樹をしていただいた方々に

は、完成時の森は見てもらえないかもしれない。もちろん、私ももういない。親から子へ、子から孫へ…。三世代ぐらいを視野に入れた長大な構想なのです。

「びわこ地球市民の森」の計画地について具体的にお教えいただけますか。

今井 ご承知の通り、滋賀県南部に位置する野洲川は鈴鹿山脈を水源とする県下最大の河川です。守山市で南流と北流に分かれ、琵琶湖に注いでいました。この分派した三角州の場所の水疎通が悪くて、洪水による災害が頻発していたのです。そこで、南流と北流の間に新放水路を作る計画が琵琶湖総合開発事業として計画され、昭和五十六年に完成しました。これによって南流と北流は廃川となり、跡地の利用が行われてきました

た。いくつかの構想が生まれ、多少の紆余曲折があった後、南流の一部を「びわこ地球市民の森」として活用することになったのです。面積は四二・五ヘクタール、延長は三・二キロメートル、幅は最大二〇メートルです。なお、北流の最下流部は広域公園「湖岸緑地」の一部としてピオトープ型の整備が平成十三年から進められています。

河川の上に森を創るといというのは条件的にはどうなのですか。このケースの場合



は難点もありましたか。

今井 一般的には良いと思います。河川の両側には河畔林があつて、それを活かせるので。ただ、残念ながらここは良質な砂利がたくさんあつて、骨材採取事業がされました。堤防の大部分を壊しているために、これまであつた河畔林をうまく活かすことはできませんでした。しかし、視点を変えれば、このような状況だったので新たなゾーニング、つまり自由な計画を立てることができたともいえます。植樹活動がスタートしたのは二〇〇一年の四月二十九日で、現在で約一万三千五百本の植樹が行われています。

### 県内外から三千五百人が参加し 最初に約八千本を植樹

二〇〇一年の「みどりの日」に植樹をはじめたわけですが、その時はどれくらいの人が参加したのですか。

今井 一日で三千五百人の方々に参加していただきました。植樹は約八千本です。県民の皆様をはじめ守山市の緑の少年団、ボーイスカウト、ガールスカウト、森林ボランティア、地元の方々、さらに県外からも数多くの皆様が来られました。ご家族も多かったですね。お子さんも楽しんでおられました。非常に良い記念になると思います。また、一度植樹していただくと、自分の植えた木がどうなったのか、いつまでも心に残りますので繰り返し訪ねていただけです。

当日の植樹は一人一本といった割合ですか。また、一本植えるのはどれくらいの時間を要するものなのですか。

今井 平均すると二本から三本です。また、ドングリから育てた苗木を持参していただいた方も数多くおられました。これは、以前から「湖国樹のホームステイ21推進事業」という啓発キャンペーンを実施していたからです。あらかじめドングリをお配りして家庭で育てていたとき、「びわこ地球市民の森」に植えてくださいいとお願ひしていたのです。植える時間は、五分もあれば大丈夫です。苗木なら、たとえばお子さんでも、木のことをあまりご存じない方でも簡単に植えることができます。土もそんなに深く掘る必要もなく、植えてから土を固めるのも足で踏めばよいので、まずどなたでも無理なくできます。これが苗木の良いところです。大きな木ではこつはいきません。苗木を植えるのには、この他も重要な意味があります。これは少し専門的なことですが、苗木を一平方メートルに三本植えても、それが全部育つわけではありません。自然の仕組みとして植えた木が競争し、強い木が残る。根をしっかりと張って、他よりも大きく成長してゆきます。大きな木との競争に負けた弱い木はその下になり、光がとどかないようになるので、もう大きくならない。このようにして強い木が育ち、森がつくられていきます。いつせいに伸びればモヤシみたいに細い細い木になって、病気や強

風で全滅するかもしれない。森はそういう仕組みで成長していくのです。

強い苗木だけが生き残り  
そこに生態系が広がっていく

なるほど、苗木が競争することで大きな森が生まれるのですね。最終的に残る強い木はどの程度ですか。それにしても、続けて観察しなければわからないことで



「2001滋賀県植樹の集い」  
の風景

すね。

今井 それはよく聞かれることですが、二十年経てば百本植えて二、三本でしょうか。育つ場所や木の種類など条件によって異なりますが。それと雑草ですね。苗木の間は、除草を行うわけですが、どうしても苗木の上に草が被ってきて、弱い苗木はやがて枯れてしまい、ほんとうに強い木だけが育っていきます。自然が自らを育む知恵です。このあたりも、ご自身の目で確かめながら、実感していただければと思います。樹木が大きくなれば昆虫や小動物も入ってきます。森ができるということは、少しずつ自然が形成されるということです。森の中に自然の生態系が広がっていくわけです。このようにお話すると、森づくりが自然再生であることを直感的にイメージしていただけるのではないのでしょうか。

「びわこ地球市民の森」がめざしておられる森のイメージが見えてきたような気がします。ところで、どのような種類の苗木を植えておられるのですか。

今井 少し基本的なお話になりますが、地域の自然環境には、地域ごとに固有性があります。樹木の成長も、もし、人手を加えなければ、滋賀県の自然条件に適した樹種が育ち、森になってゆきます。かつて、身近にあった林や森の姿です。「自然と人の共生」を考えてゆくには、地域の本来の自然を理解し、ふれあうことが原点になると思われま。こつした

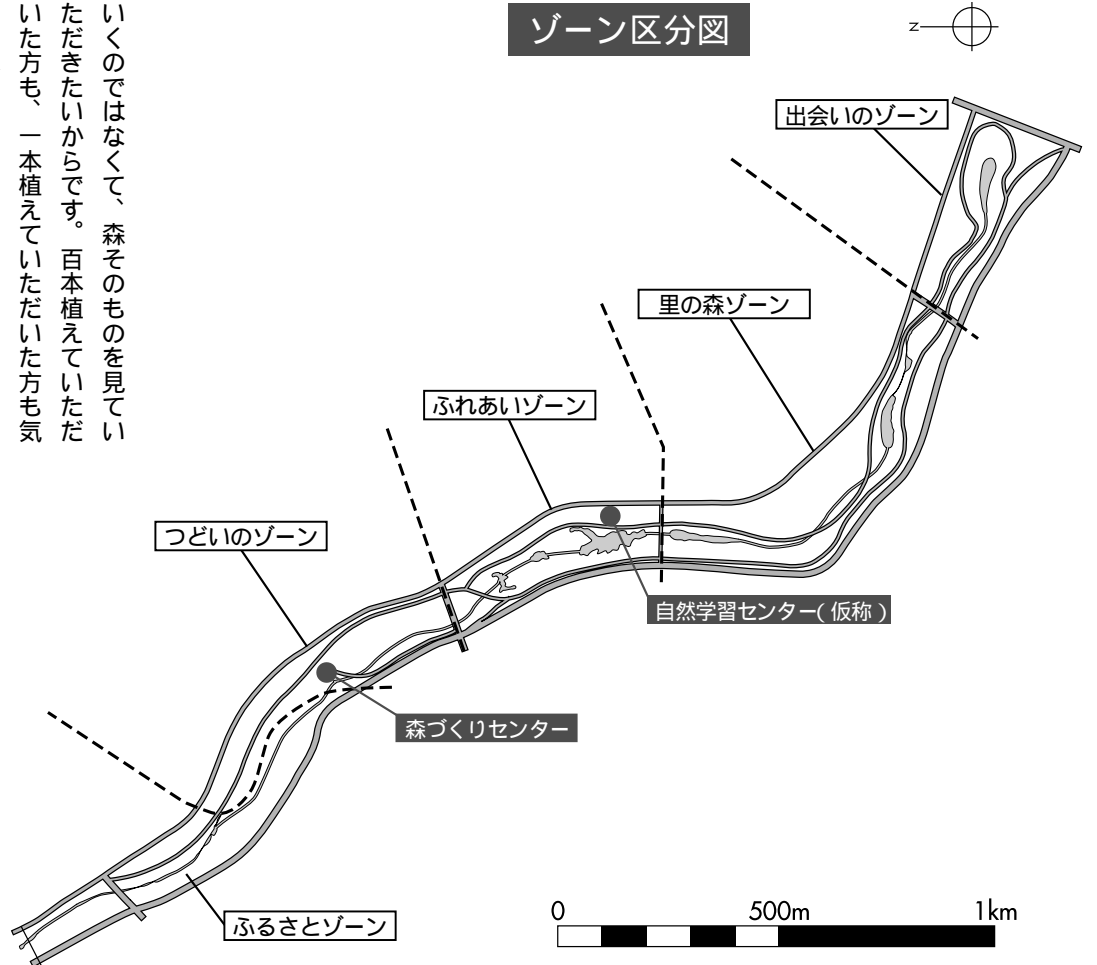
考えから、「びわこ地球市民の森」づくりでは、郷土に根ざした森づくりを目指しています。樹種としては、神社に多いシイ・カシ類、ツバキなどの常緑樹（照葉樹）と、近在の里山で見られるクヌギ、コナラ、ヤマザクラ、ヤマモミジなどの落葉樹が主体になります。三・二キロメートルの骨格部分に照葉樹林帯を、両側に里山の落葉樹を育てることにしています。県内で育ちにくい樹種や、また、郷土種でも勝手に植えては自然な森の姿が整いにくいので、あらかじめ苗木の種類を定め、計画した場所に植えていただくようお願いしています。

### それぞれのテーマに基づく多彩な五つのゾーニングを計画

ちなみに、苗木の一本のお値段はどのぐらいなのでしょう。植樹した木にはその方の名前などが明記されるのですか。

今井 そうですねえ、平均して五、六〇センチのもので一本四百円ほどです。春の滋賀県主催の植樹行事の苗木は、県が準備しています。それ以外の個人や団体・企業での植樹活動では、それぞれご負担いただいております。名札はお付けしていません。苗木なので付けることが難しいということもありますが、先ほど申し上げたようにすべての苗木が成長するわけではありませんので。それと大切なことは、自分の植えた木だけを見て

ゾーン区分図



いくのではなくて、森そのものを見ていただきたいからです。百本植えていただいた方も、一本植えていただいた方も気持ちは同じだと理解しております。すべての方に同様の目線で森づくりに関わっていただき、森が育っていく姿を見つめていただきたいのです。

森は五つのゾーンで構成されていると伺いましたが、それぞれのテーマなどを



教えていただけますか。

今井 計画図(ゾーン区分図)でご説明すると、右側がかつての川の左流で左側が下流です。これを五つのゾーンに区分して整備を考えています。全体の長さが三・二キロメートルですから一ゾーンが五〇〇メートルから七〇〇メートル程度。一つ目の森の入り口にあたる所がエントランスゾーン。人と森との出会いの雰囲気をつくり、多様な森への案内のエリアです。二つ目と三つ目のゾーンが中心です。二つ目の部分は里の森ゾーンと呼んでいます。どちらかといえば里山的な雰囲気のある場所で、季節の花々や木の実がある森。森の環境学習のフィールドを想定しています。三つ目はふれあいゾーン。水路や湿地も取り入れて、森の環境とともに水辺の環境学習ができるように考えています。四つ目がつどいのゾーンで現在ほぼ整備ができたところで

す。ここでは、自由に交流して自然と遊べる新しいタイプの都市公園として、草地広場など積極的に活用していただければと思っています。五つ目はかつての野洲川の河畔林を残したふるさとゾーンです。野鳥も多く、キツネも見かけます。現状を生かして整備の予定です。ご覧のようにこれらのゾーンが完成するのはまだ先になります。

### 子どもたちが自然を学ぶ「生きた教材」としても理想的

中核である「森づくりセンター」の役割は何ですか。子どもたちが自然との共生を実感できる「生きた教材」としてご活用もお考えですか。

今井 この役割がしっかり機能しないといけないと考えています。現在の建物は仮事務所的なもので、今後、「自然学習センター(仮称)」の機能も兼ねた施設が上流に予定されています。その役割については、まず、これからも県民参加による植樹を続けていくために、その受け入れ体制を万全なものにしていく必要があります。次に育樹。継続したきめ細やかな管理体制を確立させなければなりません。たとえば、自然の山林で

あれば水をやらなくても大丈夫ですが、ここではしっかりと水を与えなければなりませんし、除草も欠かせません。すでにボランティアの方々のお力もお借りしています。森づくりサポーターの皆さんです。個人で約百七十名、ボイスカウト、ガールスカウトも参加いただいています。このほか一般の方々も随時加わっていただき、森づくりの輪が限りなく広がっていかばと願っています。

そして情報の蓄積と発信です。植樹していただいた方のリストを完璧なものにして、再訪された時に、すぐにその場所



森づくりセンター

へご案内できるようにしたいと考えています。また、森の成長の記録や関連する情報を皆様に発信していきたいわけです。成長してゆく森の姿をニュースレターなどに託してお知らせできれば、植樹された方々の感慨も深まり、みんなの手で森を見守り、育てていくという構想もより着実な事業になっていくからです。

もう一つは、森の成長の調査と記録です。現在、四季の観察を実施しています。森が育っていかば植物の種類なども豊かになっていきます。生態系の移り変わりも確認できます。このような基礎的な情報がこれから非常に重要になってきます。自然環境保全の資料にも役立ちますし、子どもたちの自然学習の「生きた教材」としても理想的です。たとえば、学校の総合学習の授業にも大いに活用していただきたいのです。そのために環境学習や自然観察をサポートできる設備なども整備したいと考えています。また、自然学習のスタッフも県民参加、ボランティアで行っていただければ、さらに幅広いものになっていくのではと思っています。

県民の手による森づくり「びわこ地球市民の森」は、いま二十一世紀の明日に向けて動きはじめたばかりです。そして、この構想は百年の未来を視野に入れた「自然と人との共生」の壮大な実験ともいえます。ぜひとも数多くの皆様にご参加いただきたいと願っています。